

子どもの感情を動かす授業にアレンジするためのアイデア集の作成

高度学校教育実践専攻 教職実践高度化系

学習指導力開発コース

アクティブラーニング開発分野

大石 章裕

実習責任教員 泰山 裕

実習指導教員 西村 公孝

キーワード: 主体的な学び, 教師のアレンジ力, 教材開発, しかけ, 転化

1 主題設定の理由

新学習指導要領では「授業の質的改善」が求められている。これまでの研究者や実践家が目指し、主張してきた「質の高い授業」の姿とは何か。教育心理学分野の鹿毛雅治(2019)、教育思想・哲学分野の田中智志(2002)、教授学・教育方法学分野の吉本均(1982)、教育実践家の斎藤喜博(1969)などが目指し、主張してきた

「質の高い授業」の姿としては、研究分野を超えた部分での共通点が見いだせる。それは、

「子どもの感情が思わず動いてしまうような授業、学び」の姿である。これらの姿は、本年度、置籍校において目指されている授業中の子どもの学びの姿でもある。働き方改革の流れで、勤務時間に上限が設けられる中、教員がいかにして短時間で効果的に、質の高い授業をつくり実現できるかというのは、喫緊の課題である。教員に「子どもの感情を動かす授業にアレンジするためのアレンジの選択肢」を提示し、教員のアイデア力やアレンジ力を支援する。そのことで、教員は効果的・効率的に授業がアレンジしやすくなり、そのことから課題解決に繋がられないかと考え本主題を設定した。

2 先行研究

(1) 子どもの感情を動かす授業づくり

まず、ケラー(2010)のARCSモデルがあげられる。動機付けのポイントが、「注意

(Attention)」「関連性(Relevance)」「自信(Confidence)」「満足感(Satisfaction)」の4つで整理され、4つのポイントの頭文字をとって、ARCSモデルと言われている。このモデルを活用した実践的な研究も多くなされている。

次に、有田和正(1989)の転化という方法があげられる。転化とは、教師のこれだけは何としてもとらえさせたいという指導目標を、子どもが追究したいものに変えることである。そのコツとして、資料や発問の工夫などが重要であると述べられている。

最後に、西郷竹彦(1985)や鹿毛(2019)の述べるしかけのある授業があげられる。しかけとは、子どもの感情が動く(子どもがやりたくなる等)という「機能・はたらき」を引き起こすような「見事な仕組(構造・関係)」を予め仕組んでおくことである。

(2) 教育方法研究に対する批判

本田敏明(1984)は、授業方法研究をめぐる問題点として、目標や内容と乖離させて授業方法だけを取り出して絶対化してしまうこと、状況や実態を考慮しないこと、教師の意図や思想性が欠如されることなどを指摘している。特に、形式主義(教育方法が客観性をもたないことや、当時の実態や状況を考慮したりしないまま「名人芸」といった個人のカンやコツといったものだけに還元されてしまうこと)に陥ってし

まう等の問題点を指摘している。

(3) 先行研究についての考察

先行研究の不十分さとして、ARCS モデルは学びの文脈をどう工夫するかといった視座が十分に考慮されていないことがあげられる。また、転化やしかけについては、そのコツが活用しやすい知識として整理されていないことがあげられる。形式主義批判等については、先行研究に学び、授業者である教員自身が、内容や実態、状況の考慮等を行いながら授業実践を行っていく必要がある。そこに留意しながらも、教師が内容にふさわしい形式の在り方を選ぶようにアレンジのコツを整理できないだろうか。

3 研究目的と研究課題

(1) 研究目的

本研究の目的は、子どもの感情を動かす授業にアレンジするためのアイデア集（以下、アイデア集と略する）を作成し、教員のアイデア力、アレンジ力を支援するための選択肢を提示することである。

(2) 研究課題

アイデア集は次の手順で作成する。

- ① アイデア集(ver. 1)を作成する。
- ② アイデア集(ver. 1)を協力者に読んでもらったり使ってもらったりする。
- ③ アイデア集(ver. 1)のよさや課題を明らかにし、原因を分析する。
- ④ アイデア集(ver. 1)の課題や原因を克服できるようなアイデア集(ver. 2)を作成する。
- ⑤ アイデア集(ver. 2)を協力者に評価してもらい、よさや課題を明らかにする。

その過程で、次の3点を明らかにする。

【着眼点1】

アイデア集(ver. 1)自体のよさや課題は何か。

【着眼点2】

アイデア集(ver. 1)を実際に活用して授業をつくったり授業をしたりすることによる効果や課題は何か。

【着眼点3】

アイデア集(Ver. 2)自体のよさや課題は何か。

4 研究計画・評価計画

研究計画・評価計画は以下の通りである。

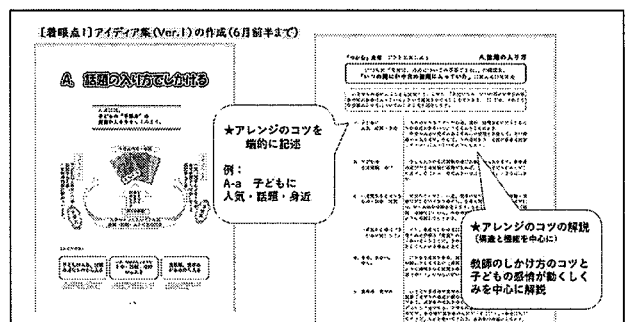
検証の視点	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月まで
着眼点1 アイデア集 Ver.1のよさや 課題は何か			アイデア集 Ver.1 の作成		アイデア集 Ver.1 を協者に 読んでもらう				
着眼点2 アイデア集 (ver.1)を 実際に活用して 授業をつくら たり使ってもら う効果や課題 は何か			コロナによる 休校など		協者に 活用した 授業実践				
着眼点3 アイデア集 Ver.2のよさや 課題は何か								アイデア集 Ver.2 の作成	アイデア集 Ver.2 を協者に 読んでもらう

資料1 研究計画・評価計画

5 研究の実際

(1) 【着眼点1】の検証

アイデア集(ver. 1)を作成し、アンケート(全17名)を実施した。



資料2 アイデア集(ver. 1)

アンケートの結果、次のようなよさや課題が明らかとなった。よさとしては、概ね関心もてて、記述内容がわかり、アイデアの選択肢から選べそうであるということである。課題としては、「アレンジのコツが分かること」と

「実際に授業をアレンジできること」の間には大きなギャップが存在するため、アレンジするコツがわかっても、実際に授業をアレンジするとなると難しいということである。また、授業がイメージできないので具体的な実践の事例が欲しいという意見も多く見られた。

(2) 【着眼点2】の検証

ア 筆者自身による実践

筆者自身でアイデア集(ver.1)を活用した授業実践を行い、参観者の教員(担任や教科担当)にアンケートを実施した。第5学年国語科、第4学年音楽科、第3学年国語科、第3学年算数科の4つの授業を筆者が実践し、感想を記述してもらった。

イ 協力者教員による日常の授業づくりでの活用

協力者教員4名に、約1ヶ月間、日常授業の中でアイデア集(ver.1)を活用した授業づくりを試してもらった後、1ヶ月後にインタビューをさせてもらった。

ウ 協力者教員による授業づくりと実践

協力者教員2名に、アイデア集(ver.1)を活用した教材研究、授業づくり、実践をしてもらい、実践終了後にインタビューをさせてもらった。

これらの実践の結果をまとめると、次のような効果や課題が明らかになった。効果は、実践をしてみると、子どもの強い興味を引き出したなどの手応えを授業者が感じたことや教員自身の授業づくりの意識が向上したこと等があげら

れる。さらに、授業づくりや授業が楽しくなることや教員の工夫が知的に整理される効果もあった。課題は、アレンジのコツが分かっても、実際にアレンジするとなると難しいということや、安易にしかけづくりに走ってしまいやすく、内容研究や実態や現実の状況、子どもの思考の流れ、育てたい資質・能力の明確化等が十分に考慮されていない授業になってしまう可能性があることである。

(3) 【着眼点3】の検証

【着眼点1】と【着眼点2】の課題を次の3点に整理した。

(課題A)

コツがわかることと実際にできることとの間のギャップを解消する必要がある。

(課題B)

具体的な授業実践がイメージしやすいアイデア集になり得ていない。

(課題C)

安易に子どもの感情を動かすしかけづくりに走ってしまいやすい。

上記の3つの課題(課題A・課題B・課題C)を解決するために、それらの原因を分析し、次のような方向性でアイデア集(ver.2)を作成することとした。その上で、実際にアイデア集(ver.2)を作成し(資料3)、アンケート(全17名)を実施した。

【方向性1】

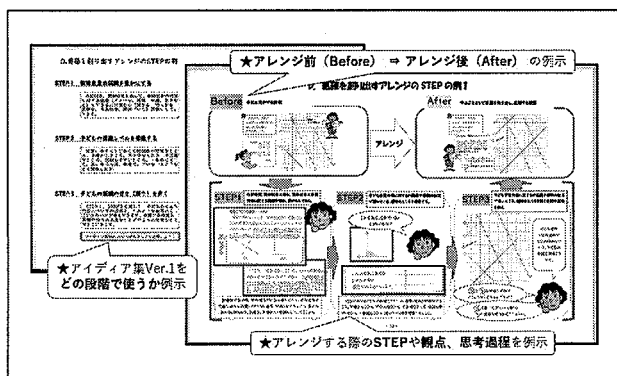
(課題A)と(課題B)の解決を目指すために、次の点に留意する。

- 具体的学習内容を抽出する。
- イメージしやすい絵図を多用する。
- 具体的なアレンジ過程を例示する。

- アレンジ過程で考慮すべき視点、アレンジ手順、教師の思考過程を例示する。
- アイディア集(ver.1)の活用場面をアレンジ過程の中に位置づけて例示する。

【方向性2】

(課題C)の解決を目指すために、「実践上の留意点」の中で、安易なしかけづくりに走らないように呼びかける。



資料3 アイディア集(ver.2)

アンケートの結果、次のようなよさや課題が明らかとなった。よさは、授業をアレンジしていく具体的なイメージがもてて、アレンジする際に考慮すべき視点やSTEPを明確に示すことができたことである。そのことによって、教員が「自分でアレンジができそうだ」という見通しをもつことができ、実践意欲を向上することに繋がっていくものとなった。アイデア集(ver.1)やその活用を通して見えてきた3つの課題のうちの、課題Aと課題Bの解決には、概ね繋げることができた。課題は、課題Cについては、注意喚起にとどまってしまっており、課題解決に繋げることができたという実践研究はできていないことである。また、アイデア集(ver.1)を、アレンジのどの段階でどのように活用したらよいのかについては、さらに分かりやすく伝える工夫が必要である。

6 成果と課題

研究全体を通じた成果を2点述べる。1点目は、アイデア集(ver.1)では、アレンジの選択肢として、アレンジのコツやアイデアがある程度整理されたアイデア集を作成することができたことである。さらに、それを活用した授業作りや授業実践によって、授業を実際にアレンジしてみることで、教師自身が実践の手応えを感じたり、教師の授業づくりの意識向上につながったりした。2点目は、アレンジのコツが分かることと実際に授業をアレンジできることの間には大きなギャップがあることや、具体的な授業アレンジの過程や実際の授業がイメージできないこと、具体的実践例が欲しいなどのアイデア集(ver.1)の課題を、アイデア集(ver.2)の作成によって概ね解決できたことである。課題としては、このアイデア集によって「安易にしかけづくりをしてしまい、形式主義に陥ってしまう可能性がある」ということが危惧されているが、その問題を十分に解決できていないということである。

【参考文献】

- 有田和正(1989)『[有田和正著作集 第7巻] 教材開発ノウハウ』明示図書
- 本田敏明(1984)「Ⅶ 教材の特質と学習行為の特性に応じた授業方法」吉本均編『授業設計のストラテジー』明治図書
- 鹿毛雅治(2019)『授業という営み—子どもとともに「主体的に学ぶ場」を創る—』教育出版
- ケラー(2010)鈴木克明監訳『学習意欲をデザインする』北大路書房
- 西郷竹彦(1985)『説明文の授業 理論と方法』明治図書
- 斎藤喜博(1969)『教育学のすすめ』筑摩書房
- 田中智志(2002)『他者の喪失から感受へ』勁草書房
- 吉本均(1982)『ドラマとしての授業の成立』明治図書